

地 刑 徒

吉 幸 野 生



中央公論社

著者 生野幸吉（しょうの・こうきち）
1924年東京生れ。1951年東京大学文学部
卒業。1966年『生野幸吉詩集』で第9回
高村光太郎賞受賞。他に『詩集 飢火』
『抒情と造型』創作『私たち神のまま子
は』がある。

徒 刑 地

© 1971 定価 750 円

昭和 46 年 11 月 10 日印刷 昭和 46 年 11 月 20 日発行

検印廃止

著者 生 野 幸 吉

発行者 山 越 豊

印刷所 三陽社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋 2 丁目 1 番町 振替東京 34 番

徒刑地

I

さあ 春がぼくらにあいさつするよ
ひるさがりはもう なまぬるい風が吹く
すみというすみからは 赤青の
花がいつばいもえだした……

ドイツ古謡

復活祭が近づくところである。どうしようもない恋愛を抱えたまま、ぼくは歪んだ年輪のような三十という年、男性というものの長い薄明への最後の門に入ろうとしていた。そのうえ、はじめて過ごしたヨーロッパ大陸の冬は、ぼくをたいして寛大に扱わなかった。町には石の臉でみおろす磔刑の像があった。寺院の正面に、中世紀人の想像した地獄が硬く彫られていると、どうやらぼくはそれを嘲笑するほどのゆとりをなくしていた。地獄というのは、空想的な魚か鰐のようなもので、牙だらけの巨きな口をひらき、しどろもどろな、ほとんど陽気なふうで行進してくる、王や自棄になった僧正や富豪を片はしから呑もうとしている。ふるびた建物の壁に、はじけたように銃弾のあとが残り、雪曇りの空に立つぼろぼろの巨大な鳥籠は焼けおちた円頂閣の残体である。

それらの亡霊は、ぼくが祖国に忘れてきたはずの悪い記憶が決して幻ではなかったことを執念ぶかく教えるのだ。

復活祭には異教風のよろこびがあるのだろう。そしてミュンヒェンの市域を囲む南バイエルンのいくつもの州は、突然吹きこんでくる幻覚のような吹雪や、真青な晴天をくりかえしながら、ともあれ春へ進んだ。市を貫流するイーザルという川に、青濁した水が水嵩を増した。南のほう、氷河が歪んでいるアルプスの山々から雪解けがはじまったのだ。公園のなかの疎林で、あかるいものの閃くのを看る、と、それは、イーザルの分流に、思いがけぬ海鳥のすがたをして、鷗の翼が狂うように翔っていたのだ。

そのころのこと、ぼくはある未知の女から招きを受けた。

ミュンヒェンから南へ一時間ほど汽車に乗る。という、このバイエルンの古来の首都とガルミツシュ・パルテンキルヘンの間あたりだが、アムマ川に潤うるされる沼沢地中の高原に、ヴァイルハイムという古い小さな町がある。ぼくを招いた女はそこに住んでいる。

凝灰岩の寒駅に下車する前、ながながと横たわる鈍色の湖を見た。それは凝止したように寒げであったが、凍っているのではなかった。一月ほど前の通りすがりに同じ湖が鉛いろに氷結し、巨きな鱗を入らせている、その姿を見たおぼえがある。

凝灰岩の壁の外に出る、いきなりしんかんと寒冷な光があった。二時間ほど遅れ、電報を打って置いたのだが、それが届いたかどうか。——何人かの人がいる駅前の光線を、白い外套の女が突っ切ってきた。蒼い眼をぼくは見た。

「Her Kurosai?」神経質にひびく声がぼくの名をよんだ。それがぼくを招いたシェーレ未亡人、ヒルデガルト・シェーレだった。彼女の背丈はぼくほどでもあったであらうか。つれだつて歩きだしながら、冷たい光をうけている彼女の頬に、傷痕のような窪みをみた。

ひなびた、三階ほどの破風屋根がしらじらした正面を曝らして並んでいる小さな町であった。その破風がひとつだけ欠けたように扁平になっている。窓をみあげて女は、「ファァーティ」と呼ぶ。だが、下から突っかって硝子をあげてあるその狭い窓に、人のけはいがなかった。ぎしぎし鳴る階段を登りつめるとようやく父らしい老人が姿を現わした。

階上の居間には乏しい北の光線が流れ、その老人はほとんど黙っていた。冷えた空洞のなかで、ぼくらはとぎれがちに閨歴の断片をつたえあったが、何事を自分が語ったかはもう定かではない。ぼくのために控えられていた食事の、灰いろに荒々しい麵麴や、脂の光や木の葉を焼いたように苦かったコーヒーを思いだすだけである。

南々西の風が吹きしきる日だった。破風屋根のあいだの街路は戦慄と光にみちていた。もう三時を廻るころだったろう。ぼくらは小さな「遊覧」に出た。町から離れた村落にこのあたりで著

名な教会がある。それを見ようというのだった。搾乳業者の店あたりから抜けでてゆくと、裸木のむこうに真白な校舎を見た。女はそこで仏伊の言葉を教えるのだ。その町はずれには崩れた城壁が横切っていた。

氷河が遺した石、と女がいうのは、石壁の前の草原に不安定な恰好で立つ巨岩である。摩擦の痕が石のはだにあった。

風はいっそう吹きしきった。風のくる方向をさかのぼれば牧場がひらかれる道理だった。やがてそこからはもう野外になるという道ばたで父親がぼくたちを呼び留めた。うつけたような老人は、遅れがちに蹠けていたのだ。老人が首から吊るしているふるびた箱型の写真機が目にとまった。

（記念の撮影か。媒酌は父親だ）ヒルデガルトと並んで写真機の前に立ちながら、奇妙な疑問がつづけて心に閃いた。長い紐の先のシャッターを押す、老人の硬ばった指をみつめた。（光がはい、あのたぶんぼんやりと曇ったレンズの奥で感光する、だが、あの瞬間がいつたい何を捕えたことか。風の寒さをあびて羞じらっているヒルデガルトのまぶしそうな眼、そしてかたわらの東洋人の蒼ざめた顔を。……）（現像液が青いフィルムを洗う。暗室の闇のなかで頑丈な老人が茫然とする。いないのだ！ 東洋人の撮っているべき場所が、空虚なかがやきでしかない！ 陽にきらめいている牧場の柵のあたらしい有刺の針金、そして裸木のすじ張った幹、ひるすぎの

空。……)

かわりあって撮影は一巡した。そのあいだも父親は皺だらけな手で合図するだけである。黒いよそおいの老人はふたたび真昼のなかの暗い沈黙へ籠りにゆくものらしかった。年老いた唇、眩くようにしじゅう慄えている唇で、昔の記憶や故人の名前を反芻しながら。彼のねぐらは裏向きの硝子窓がずいぶんと汚れ、そのため黄濁した光が漂う部屋であった。硝子の外の鱗がたに葺かれた屋根に鳥がたくさん集っていたのをぼくは思った。たしかに鶺鴒つぐみのたぐいであるのに、ヒルデガルトは雀だと言った。訂されると神経質に笑った。傷のような笑いだった。

「アノ道ハ、ガルミツシュ・パルテンキルヘンニユク」

固い横顔をみせたまま、ヒルデガルトは言った。牧地のあいだにあらたに泥を掘りおこされた耕地が、新鮮な小豆色の縞をよこたえ、ゆるくたわんで昇る広大な地形のはてに、氷の針や氷の瘤が悲しいまであきらかに輝いていた。そちらへ向う道、針葉樹の暗い帯に添って、黒や赤のみずすましののように小さい自動車はが走せてゆく道路を、オリュンピア道と彼女は呼んだ。ツークシユピツツエやカールヴェンデルなど、のちに知った山々もその唇から発音された。

おりしも主受難の日と呼ばれる日曜日にあたっていた。

かすかな氷の牙で光を噛み、あるいははるかからきびしい氷壁の小絶対をしらせる、国境に氷りついている山塊を望んで、ぼくらは闇雲にあるいた。数日前からフェーンとよばれる気象が起

って、残んの雪をいちどきに消失させた。畝にはときとして泥が窪んで、棄てられた時間のよう澄んだ水が溜っていた。道もまた雪どけで難渋だった。

そうしてみるとヒルデガルトの肉体には強靱な野性がある。先立つようにして石英の粒がきらめく白褐色の粘土の道をゆく。洗いだされたまま半乾きの、粘土の塊をとびとびに跳んだ。

野の上は、蒼空が凄烈だった。そのいちにち、たえずあらしのけはいをひそめたような、いたいたしい冴えかたのまま遷っていた空であった。

白く凍^かけたような雛菊をみた。鷺鳥の花とよばれるものだ。そんな丘ふところの一つで、ヒルデガルトは立ちどまった。蒼空からはぎごちない影が落ちてきて、烈しく慄えながらまた昇っていく。

「ひばり」と彼女は言った。いたずらっ気を匿した生真面目な表情で、外套のかくしから紙の袋をとり出した。互いにほほ笑んだのは、それが共通の小さな秘密だからである。彼女が、その砂糖の衣が固くついたハシバミの実一袋を、同じ生真面目な顔つきで買ったのは、よくを駅から自宅へみちびく途中だった。ちょうど町には市が立っており、狭い広場を中心にひなびた屋台が並び、安価な靴下や革バンドやチロル風の上着が陳列されていた。ネッカチーフの真紅や緑がけはけばしかった。射的の店があり、長いズボンの少年が銃床を頬にくいいらせている、その隣で、大きな鉄の鉢にハシバミを炒っていたのだ。

固く甘いその核を噛み、ひなびたあじをぼくはこのんだが、しかしぼくは別のこと、別の光景をおもひ浮かべた。なぜこの女はまるで異国から来た女のように思われたのか。女は買いおわると叫びごえや手廻しオルガンのひびきのなかをそくさと突っ切った。なにかしら冷やかな疎遠が、彼女と町そのものとのあいだにあるのが、うすうすと感ぜられはしなかったか。（おれ自身がそうだからなのか。そしてまたおれ自身、傷を負っているからなのか。おれはいつもこんな女と共通する。日本にいてもそうであつた……）

蒼い眼がぼくを探っていた。睫毛が暗く、その下の蒼い瞳孔に疲れと飢えとがあつた。澄んだひるさがりの野外がかえって意地悪くて、顚顚こめかみから頬にかけてがそそけ立っている。（あなたは知らないだろう）とぼくは心中で独語をつづけた。（このひろびろとした眺めのなかにあつてさえ、ぼくがある大きなさけびを、だしぬけに空のなかから通ってくる、黙りこくつたおおきな呼びごえを、焦躁して待っているのを。いいか、それはこういうのだ）

はるかな氷の凹凸はひかりを研いでいた。それは風が研ぐのだ。風が冷えびえとそっちの方からわたってくると、草地には雪の翳りが呼吸のようにひろがると思う。ぼくは耳をそばだてて待つかのようだった。

だが、さけびは幻聴でさえないのだ。それは苦味のある白い粉末に換算される、いや、恐らく

はその数ミリグラムに換算されうる、微量の過失を咎めるだけだ。あの日本の薄暗いみぞれにふりこめられた、昼のうへの過失である。処方箋のようにぼくの心に貼りつけられている退屈な断罪である。二万キロという円い隔たりが、六年の歳月を消し、いきなり、アンブルを切っているぼくの手つきや、鍔が硝子をぎりぎりとならせると軋らせる小さなひびき、硝子が二つに割れる脆い感覚、注射器の針の光、そして上膊の萎びた黄ばんだ肌、そのもどかしい、衰えた表皮の抵抗、それらの記憶をぼくの眼の前に差しつけるというだけのことなのだ。

おお、かぜは大雨をふくんで吹く。そんなことばかりどこからか浮かんできた。

「ワタシハモウスグスペインへ出カケマス」突然ぼくは口を切った。風が唇を冷やしていて、不自由だった。「モウ四日モシタラ」

「Ach!」とヒルデガルトは嘆じた。「ソレヲワタシハ知ラナカッタ! Ach Spanien!」蒼い眼にみるみる羨望と喜悦の色が現われてきた。「わたしたちの家が平屋根だったのをおぼえているか」と彼女は急いで言った。「あれはほとんどスペイン風あるいはイタリア風といていい。だからあの汚ない家を選んだのだ。そしてまた、汚ないのが気に入ったせいでもあった」

「わたしはスペインを知らない。でも、長いあいだイタリアのパレルモで暮らした。わたしはそこで学び、わたしはそこで少女だった。そして、ああ、あの狭苦しい、陽気な人間でいっぱいな、

イタリアの裏町をどんなにわたしは愛するだろう！　あの汚穢、あの生と死、あの官能！」

「逆光のなかに聖らかな旗みたいにさがっている、あの隘路の真上の洗濯ものの美しさなんか、どう言ってきかせたって判りはしない、この土地のひとつには！　ことしの冬も、わたしはさびしくて仕方がなかった。色彩というもの、太陽というもの、それが欲しくて飢えきってしまった。ありったけのイタリアの絵や、海の写真、岬の写真、大切にしている刺繍、わたしの部屋の壁という壁に貼った……」

Ich friere hier ^{アイ フリーア}hier ^ニニ ^フフ ^フフの呟きをぼくは思いおこした。ここではわたしは凍えてしまうわ。

だがヒルデガルトの神経質な嘆声は対照的な不幸を一層彼女のなかに確めさせるばかりであった。なぐさめをぼくは言った。「イタリアの太陽がそんなにもあなたを惹く。でも、まもなく春の奇蹟がくるではないか。くろずんだ木の皮も草もみんな真青に噴きだしてくる。ほら、さっき見かけた雄鶏だって、あなたがたが櫛とよぶ鳥冠を、あざやかに真赤にして、もう凍えてはいなかった。塗りこめた円石が剝がれた漆喰から露われ、それにくつきりとひかりがあたった。窪みやはりくつきりと壁をうがっていた」

貧しい語彙がどれほどぼくの表現を相手につたえたかはしれぬ。それに、ぼくはまことを言えば、スペインへの団体旅行を、そのときなお決しかねて、するずると決心をひきずっていたのだ。ぼくには、離れたくない愛人^{ミニオン}があつた。三百マルク、先払いしたその金額を擲てばよいことであ

る。

周りにいささかの農家を固めた、上部に八稜の塔をもつ凝灰岩の教会がゆくてに現われていた。

★

さて、その主受難の日、というとその年の暦では三月二十七日がその日曜日に当たっていたのであるが、当時郊外から移って来たばかりであった、ヘルコーマーという小さい広場のとあるアパルトマンで、ぼくは前の晩から疑惑に悩まされていた。脳裏に、小麦色のつややかな腹を突っぱり、強靱な太腿をひろげたりしている日本の娘がしつこく想像された。聞きなれた、唐突な歓喜のさけびが、そのときは、硬直したなにかにつらぬかれ探られる、そのはじめての苦痛のなかからきれぎれに走るのだ。きらきらする真黒な眼が見え、その上に固く隠られる京人形風の臉が見え、そして毛の荒い男の指と、厚い唇とがみえた。

純白な部屋に、鎧戸ごしに光線が朝を告げる。夜通しの交媾図がまだ心に巣くっていて、ぼくは俄かにある卑劣を着想した。ゆこうと言った。(卑劣によつておれは次々に失うのだが)と、どこかで悲しそうな顔をした蒼ざめた男が呟いていた。……

蒼ざめたその日本人が、やがて黄いろい円盤を棒の先に立てた停留所でバスを待っている。円盤には、停止の頭文字であるHが黒く描かれていた。冷えびえした舗装のむこうでは、ピュッピ

エルという名の勧工場風の食品店が、正面いっぱい青い鐵戸をおろしていた。

広場の中央の木造時計塔は八時四十五分だった。022のバスがバイエルン青の巨体をふっくらと滑らせてきて停った。

ぼくはやがて五階建ての古びた建物の側面に、頑丈な扉を押した。それからしばらくは階段部の同じ長方形をつぎつぎに旋けて昇る。いたんだところが、ときどき、ぎいと鳴った。まだ九時には十分ほどもある。——もし加東が来て泊ったなら、まだいるはずだ。そうでなくても不意打ちすれば顔で判る。

在留の邦人は大方は未亡人のもとに暮らしていた。最後の階の奥、ドアの横に出ている表札もそのひとりである。ぼくはゆるんだ老女の乳のようなベルの鉤を押しながら、習慣のように読んだ。「フラウ・ポッピンガー」そしてその下に、鋸で留めた名刺、「フロイライン・ヨーコ・ツチャ」荒い走り書で、二度ベルを鳴らせ、と添えてある。

ベルが厚い扉のなかでとぎれて鳴り、曳きずる足音、柔らかな布の室内靴の摩擦を聞いたのは、しばらくのちだ。

ふくよかな皺に括られた薄青い眼をぼくは見た。扉を一尺ほどだけひらき、その老婦人はどうやら怒りを押さえるらしかった。「フロイラインはまだ眠っている。きょうは日曜だ、安息日ではないか」

「焦眉の願いがある」とぼくは噎れた声で言った。「是が非でもお会いせねばならぬ」

もう未亡人の顔を見たとき、疑惑のあらかたは消えた。ぼくはそのうえ確めるというよりも、急に陽子を見なくなったのだ。ようやく信仰篤い保護者はぼくを内部に伴ない入れた。

土屋陽子の部屋は暗い廊下を突き当って鉤に折れた先にある。ぼくはゆきどまりのトイレットと陽子の部屋のドアとの対角線に立っていた。壁に、なぜかしらぬが、安っぽく彩色されたアメリカインディアン^①の絵葉書が三枚貼りつけてある。それは柔らかな頬をした未亡人ではなく、鼻も顎も險しく尖った、灰色に落窪んだような顔付きの、未亡人の姉がしたことだと見るたびに想像された。貴族階級から過去に得ていた知遇を誇りにしているその寄食者は、アメリカインディアンについても、浪漫的な空想があり過ぎたのだと。

羽蒲団のふちにだか、あるいは睡眠そのものにだか、塞がれたような声がしていた。光がひらかれたドアから流れ、未亡人は、「入れ」と促した。陽子に対しても立腹した風である。

そして急いでカーテンをたぐったらしい、巨きな部屋に、娘が立っていた。太縞の丹前をナイトガウン代りに羽織って、彼女は眼ばたきしない強い眼で闖入者をじっと見た。

「すまなかった。お願いがある」とぼくは言った。もはや無用なことであるのに、部屋の左奥にある、光沢のもう黝ずんだマホガニイの巨きな寝台へ眼を配った。焦茶の絹のカヴァーが、乱れたものの上に大慌てにかぶせてあった。ぼくの視線が戻ると、